

活動記録等を出展 赤石公民館まつりの展示部門に

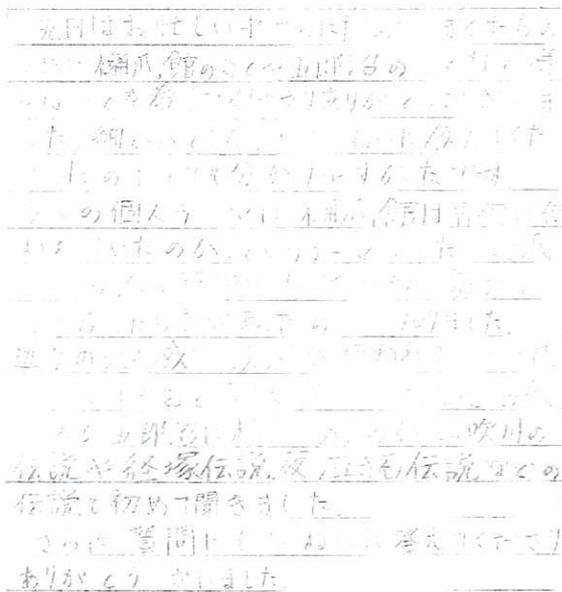


赤石公民館まつりににおける樋爪館懇話会の活動記録等の展示

赤石公民館まつりの展示部門が10月28日(土)、29日(日)の2日間にわたって開催された。

赤石地区の団体、個人が地域おこしや生涯学習として取り組んだ活動記録、作品等が華やかに展示され、来場者の目を楽しませた。

樋爪館懇話会では、本年度の会報、紫波一中生徒の樋爪館周辺の現地説明を受けた礼状、更新された樋爪館周辺想像歴史絵図、五郎沼浮御堂想像図に加え、過年度の樋爪館関係資料集を展示し、樋爪館跡・五郎沼への関心を呼んだ。



紫波一中生徒 「紫波町の歴史を学ぶ」

上記赤石公民館まつりに展示した礼状とそれに添付された現地案内の写真からそれぞれ一部を紹介する。

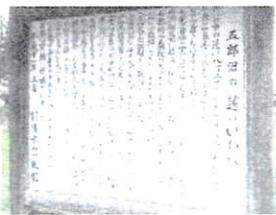
生徒からの礼状と添付の写真集から

【右上】蓮の説明板

【右下】箱清水石卒

都婆群での現地案内

第1学年「総合的な学習」 フィールドワーク



《《令和5年12月～令和6年1月行事予定のお知らせ》》

<p>令和5年 12月 3日 (日曜日)</p>	<p>第30回 定期講演会</p>	<p>時間：午後1時30分～3時30分 場所：赤石公民館 講堂 演題「戦国期の斯波御所と高水寺城」 講師 花巻市教育委員会 文化財専門官 室野秀文氏 会費 会員200円 会員外500円</p>
<p>令和6年 1月17日 (水曜日)</p>	<p>第146回 月例発表会</p>	<p>時間：午後7時～9時 場所：赤石公民館 和室 発表者 宇部真澄 テーマ 陸奥話記を読む④ 発表者 宮良男 テーマ 日本の仏教① 曹洞宗(2) 永平寺と道元</p>

令和5年10月18日に開催した月例発表会において、発表者が用いました資料から抜粋し、さらに文章は縮めて掲載した部分がありますのでご了承願います。

宇部真澄の「陸奥話記を読む③」

(16) 頼義、陸奥の国人の信望を得る

康平五年の春、頼義朝臣の陸奥守の任期が満了するから、後任に高階朝臣経重を任じて陸奥国の国守とした。だが、陸奥国に入り着任した後、程経ずに京へ引き返して来た。というのも、陸奥国の人民が皆前任の国守頼義の指令に従ったからである。

(17) 武則来援し、頼義、吉例の営岡に陣立す

清原真人武則は、同年の秋七月に、一門の子弟と一万余の手勢を従えてやって来た。將軍はたいそう喜び、三千余人の兵を率いて、七月二十六日に国府を出た。八月九日に栗原郡営岡(たむろがおか)に到着した。

※昔、坂上田村麻呂將軍が蝦夷を征伐した日、ここで軍兵の部隊を編成した。その時からこの地を営(たむろ)と呼んでいる。塹壕の跡は今も残る。

武則が先にここに陣を構えた。期せずして出会い、互いに心の思いを述べ、それぞれ流れる涙をぬぐい、切なさとしきは胸中に交錯して湧き起った。

(18) 武則、忠節を誓う。八幡神の吉兆

そこで、武則は京の皇城を遥拝して、「臣武則は子弟を出陣させ、將軍の御命令に従いました。望みは皇室への忠節を行うことであり、我が身の命を棄てることを惜しみません。八幡神社の三柱の神よ、臣の真心を御照覧あれ、もし身命を惜しんで死力尽くさなかったとしたら、必ず天神の矢に射られ真っ先に死にましよう」と言った。

今日この日、鳩が現れて、陣の上に飛び翔けた。將軍以下、すべての將校がこの瑞相を伏し拝んだ。そこで杉山道を進軍して磐井郡中山の大風沢に野営した。

(19) 小松の柵の合戦

將軍は武則に言った。「明日戦いを始めるつもりが、にわかには狂い、好機を得て始めようともくろんだ戦いは既に始まった。しかし合戦は戦機をとらえて起こすべきで、必ずしも吉凶の日時で選ぶものではない。戦いの機をよくみて、早晩いずれも戦機のままにするのがいいのだ」と。

武則が言った。「兵を動かす時機は、ただいまが最上の時機です」と。そこで騎兵に要害を囲ませて、歩兵に城柵を攻撃させた。

※騎兵隊が要害を、歩兵が城柵を攻めるという役割分担が書かれており、歩兵が戦闘で果たす役割が大きいことが窺える。

(20) 官軍、小松の柵を攻めて、騎兵を撃つ

この柵は、東南に深い青々とした淵が囲み、西北に壁の如くに切り立つ青巖を背負っている。攻撃する歩兵や騎兵は攻め悩んでいる。しかしながら剣の先で切り立った崖に足場を穿ち、鋒を杖とも頼んで岩壁をよじ登った。城内の賊兵は算を乱して敗走した。

賊兵宗任は八百余騎を指揮して、城壁の外に出て攻め戦った。官軍陣はたいそう疲れていて、宗任らを撃退することはできない。そこで將軍は五陣の兵士らと呼び寄せて、勢いを合わせ加えて宗任の軍勢を攻めさせた。賊軍は小松の城を棄てて逃げて行った。

(21) 官軍、長雨と兵糧の欠乏に苦しむ

兵卒を休息させ、武具を整備するために、賊軍を追尾し攻撃することはしなかった。さらに長雨に遭って、なすことなく数日を過ごした。兵糧が尽きて全軍が飢え疲れた。

磐井以南の諸郡の民は、宗任の命に従って、官軍の補給物資や行き来する人民を妨害したり略奪したりした。このゲリラを捕縛するために兵士千余人を栗原郡に分遣した。

また磐井郡仲村というところに兵を入らせた。そこは官軍の陣から四十里余り離れている。耕作された田畑や民屋がたいそう多いから、兵士三千余人を分遣して、稲や穀物などを刈り取らせて、兵糧にあてようとした。